

暴かれた真実。業界黙示録

「暴かれた真実・業界黙示録」は、実際に起こったパチンコ・スロット業界の事件・詐欺・摘発などをもとに構成された実録風ドキュメント連載である。登場人物や店名は仮名化されているが、事件の内容は極力事実に基づき構成されている。閉ざされたホールの奥で何が起こっていたのか――いま、その真実が暴かれる。

File.02 実録・浪速裏基板ラインの崩壊―大阪・千日前裏モノホール摘発録

曖昧な日常

「裏やつてるって、わかってましたよ。でも、黙つとくのが仕事やったんです」

そう語るのは、大阪・千日前にかつて存在したホール『スリーセブン』ならば西口店（仮名）の元ホール社員、藤沢翔一（仮名・当時32歳）。あれから20年が経った今でも、彼の声には一抹の後悔と、それを超える「納得」がにじむ。

藤沢がその店で働き始めたのは2001年の夏だった。真つ昼間のアーケードに並ぶ求人誌スタンドで見つけた一枚の折込チラシ――「スロット専門・時給1300円・未経験歓迎・面接交通費支給」。当時アルバイトを転々としていた彼には、それがやけに輝いて見えた。地下倉庫のような事務所で行われた面接で飛んできた質問は想定外だった。

「警察関係者とながりある？」
「黙つといってくれるタイプ？」
「出入り激しいけど、大丈夫？」

エラーも記録されていない。メダルを流すときも無表情で、カウンターの女性に軽く会釈するだけ。

「当たり台を引いてる？ いや、違う。あれは知ってる。仕組みをわかってる打ち方や」

店内で囁かれ始めた。

「テツヤ、裏業者と組んでるらしいで」
「信号飛ばしてんちゃうか？」
「フラッシュで基板裏返す道具があるらしい」

テツヤが勝ちすぎる日が続いた。3日連続で万枚オーバー。それを不自然だと思わないのは、もはや業界を知らない素人だけだった。藤沢は後に、店長から「あいつには絶対話しかけるな。近付きすぎたら火傷する」と釘を刺されたという。

仕込まれた崩壊

2003年2月、開店前の店舗に警察官が2人現れた。

「生活安全課の者です。機械の任意確認をさせてもらえますか」

これは「事前警告」だった。数日後、摘発が来るという予告。業界の暗黙ルールでは、最後の「逃げ道」を与える合図でもあった。

店内がざわついた。リモコンが回収され、操作ノートが焼却され、データファイルが削除された。駐車場の片隅

荒涼としたコンクリ床、壁際の古いATM型両替機、灰皿の山――この店が「普通じゃない」ことはすぐに察した。だが、日払い・高時給・昼夜逆転なし――そういった条件が、当時20代半ばで借金を抱えていた藤沢の背中を強く押した。

赤島、黒島、神の島

店内はスロット200台、パチンコ150台の中型店舗。入ってすぐ右がパチンコ、左の階段を上すると全面スロット。その2階フロアには、常連の間だけで通じる妙な呼び名があった。

「赤島」「黒島」「神の島」

赤島には『北斗の拳（改）』、黒島には『アラジンA（裏）』、神の島には『ミリオンゴッド（特改）』。それぞれの島には「何か」が仕込まれていた。赤島は爆裂の入り口、黒島は破壊と狂喜の交差点、そして神の島は伝説級の地獄門――常連はそう呼んだ。
朝イチのフリーズ連発、ボーナス後

即前兆、ノーマル機種なのに一撃5000枚。藤沢が最初に担当したのは黒島だった。

「最初は訳わかりませんでした。でも、周りを見てすぐ気づいたんです。あ、これ、普通の台ちゃうなって」

裏モノと呼ばれる改造台。合法的な見た目で堂々と並び、しかし挙動は非合法。型式番号は正規と同じでも、基板の中身が違う。もしくは「もう一つ」の基板が搭載されている。店長は「魂を足した」と冗談交じりに言った。

「リモコン操作で波を止めたり、出玉を操作したり。そんなのが本当にあるのかと疑ってたんですけど、ありました。全部、事実でした」

仕事としての裏モノ

ホール社員の仕事は、出玉の調整だった。特定の島で爆発が続きすぎると、無線で指示が飛ぶ。

「A島、波止めといて」

シミュレーション資料「までもが押収された。そこには「1日平均粗利目標180万円」など、具体的な数字が赤字で書き込まれていた」

「これは明らかに意図的。営業としての計画的に運用されていた」

新聞には「千日前のホール、不正基板設置で摘発」「改造スロット30台押収」と見出しが踊った。地元テレビは朝から晩まで店舗前を中継し、千日前商店街には異様な人だかりができた。店長、副店長、裏業者の技術責任者が逮捕された。藤沢は事情聴取のみで釈放されたが、業界からは「終わった人間」として扱われた。

崩壊の余波

摘発の翌週、千日前エリアの複数のホールが「台数調整」と称して裏モノ島を閉鎖した。台移動のためのトラックが頻繁に出入りし、バラエティ島はごっそりと様変わりした。

業者間の裏流通もストップした。

「もうあかん。警察が本気出した」「次にやられるのはウチや」

そんな噂が業界中を駆け巡った。メーカーの営業マンでさえ「正規台しか売れなくなるかしれん」と戸惑いを隠せなかった。

藤沢は転職を繰り返した。飲食、倉庫、警備――どれも長続きしなかった。履歴書に「パチンコ店勤務」と書けば、それだけで警戒された。闇バイト

「黒、ちょっと冷ましとこか」
「神の島、今日は稼がす日やで」

バックヤードにはノートPCがあり、そこから台番号を指定して操作信号を送る。中にはリモコンで直接信号を送るタイプもあった。スロットの内ポケットに「魔法のリモコン」を忍ばせて巡回する役職もいた。

「打ってる客はみんな、自分が出してると思ってる。でも、実際は、出させられてるだけやった」

それが業界の「演出」だった。

常連の中の異物

そんな中、一際目立つ常連がいた。スキンヘッドにサングラス、上下ジャージ。口数は少なく、淡々と台を選び、淡々と出す。彼の名は「テツヤさん」（仮名）

テツヤは、朝イチで黒島の角台に座ると、2時間以内に万枚近くを吐き出させ、何事もなかったように帰っていく。その台に異常は見当たらず、基板

にも誘われたが、もう裏に関わる勇氣はなかった。

今は大阪市内で清掃業を営んでいる。夜明け前にオフィス街を回り、ガラスにうつる自分の姿を見て、「あの日の電源OFF」と同じ静寂を感じるという。

語り部の証言

「今思うと、あれは地獄でした。でも、地獄の中ではそれが日常やった」

藤沢はそう言って笑った。皺の深く刻まれた目尻に、かつての炎がわずかに残る。

「裏つてな、誰か一人が悪いんじゃない。欲が重なったときに、生まれるもんなんです」

「勝たたい」客と、勝たせて見せたい。店と、金を回したい。業者。そのすべての歯車が噛み合ったとき、裏モノは回り始める。歯車は一度かみ合えば全員を巻き込み、誰も止められなくなる。

「今の若い子らには信じられんやろけど、そういう時代があったんですよ」

最後に、彼はこう締めくくった。

「夢に出てくるんです。あの異常な出方、光るパネル、爆裂する音――あれは、忘れようと思っても忘れられへん。それでも、俺は語り続ける。二度と、あんなもんが「当たり前」にならないように」

